

現代に輝く英雄ナポレオンの遺産

高村忠成

1. はじめに——ナポレオンの評価をめぐって

フランスで今日、一番人気のあるリーダーという点、いくつかの世論調査などによりますと、第二次世界大戦でフランスを勝利に導いたドゴール大統領、彼が1番です。2番は、フランスという国が確立する以前のシャルルマーニュ大帝、すなわちカール大帝です。フランスという国が成立する以前のフランス、ドイツ、スペイン等々がまだ同一国家であった西ヨーロッパの中心部を支配した指導者であるカール大帝が2番になります。3番が、ナポレオン。4番が、救国の少女ジャンヌ・ダルク。これがフランスで人気のあるリーダーの一般像である。ということが、各種の世論調査の平均的結果ということが出来ます。

これから、3番目に人気のあるナポレオンについてお話ししますが、一般にナポレオンといいますと、戦争をやった人、独裁権力を振るった人、そういうイメージが強く、むしろ嫌っている人が多いかと思えます。しかし私は、ここでは、そうした戦争とか独裁者とかいう側面からナポレオンを見るのではなくて、むしろ政治、行政とか、産業、文化とかを通した近代国家の建設者という側面に光を当てて論じてみたいと思えます。すなわち、ナポレオンという人ほど戦争というイメージとまた平和のイメージと、二つの側面を併せもつ人はいないのではないかとっても過言ではないのです。

考えてみますと、人間というのは、偉大になればなるほどいろんな側面をもつものです。ちょうどプリズムのように、異なった角度から光を当てれば異なった光を放つというように、その人が偉大であればあるほど非常に多面的なキャラクターを醸し出すのです。偉大なリーダーというのは、一面、人間的に優しく、包容力がある。すべての人を包み込むという側面がある。しかし、他面からすると、大変に厳しい。厳格に物事を判断します。そのために冷酷で非情に映る面もあります。人間は、このように大人物になればなるほどさまざまな側面をもつものなのです。

このことは、思想家や哲学者にもあてはまります。偉大な思想家や哲学者の考えは、いろんな風に解釈され、理解され、その人をどのように規定するかが困難な場合があります。そのため、その人の思想や哲学をどう理解するか、あるいは解釈するかということをもめぐって、たくさんの研究がなされるのです。逆に、あんまり偉大でない人の考えは単純で、「この人の考えはこうである、以上終わり」で済んで

しまう。人間は偉大になればなるほど、誉められるし、称賛もされる。しかし逆に、批判にさらされるし、罵倒されることもある。じつに多様な側面を持つということをご理解いただきたいと思います。

ナポレオンという人は、まさにこの典型的な人物の一人でありまして、ナポレオンに傾倒する人もいれば、反面、嫌いだという人もいます。ナポレオンの歴史上の業績という点からいっても、今日のフランスにおいて、ナポレオンが好きだという人がいながら、ナポレオンは嫌いだ、自分の先祖を殺された、戦争で多くの人を殺した、とって評価しない人もいます。母国フランスでもナポレオンの評価は分かれているのです。

しかも、ナポレオンの見方は、国や地域によって、さらに違ってきます。フランスと戦争をしたイギリスやドイツやスペインやロシアや、そういう国に行くとそのほとんどがナポレオンは大嫌い。「殺人鬼」、「戦争魔」、というようなイメージです。じつに悪いイメージです。ところがヨーロッパを離れてアメリカに行くと、ナポレオンのイメージは良くなります。フランス革命を受け継いで革命を成就させた偉大なリーダーになるのです。さらに、日本、中国、東南アジア、そういう国になると、ナポレオンは英雄視されます。フランス革命の混乱から革命を救い、成就した偉大な英雄、と見なされるのです。アジアなどでは、一般に、ナポレオンの評判は高いといえるでしょう。

特に日本では、江戸時代からナポレオンという人の名前は聞こえてきておりました。明治維新と関係の深い吉田松陰もナポレオンを大変に尊敬していました。松蔭は、ナポレオンに見習って「自由」という考え方をもとに国を創り直さなければならない、ということをいってました。西郷隆盛もナポレオンに一目置いていた。ナポレオンとアメリカ大統領ワシントンを彼は大変に尊敬しておりました。こうした点に代表されるように、日本では、江戸時代から明治維新、そして明治時代を通じてナポレオンという人は偉大な英雄というイメージで受けとめられてきました。もちろん客観的に分析したり、あるいは批判的に研究している人のなかには、ナポレオンの否定的な側面を指摘する人もおりますけれども、一般的には、日本人はナポレオンを高く評価しているといっても過言ではないと思います。

このように、ナポレオンという人は、母国フランスはもとより、ヨーロッパ、アメリカ、アジアなどにおいて、その評価に大きな違いがある人物です。これは、前述したように、ナポレオンという人がそれだけ偉大であり、そのために多面的な側面をもっていったということの証左といえましょう。

ちなみに、今まで世界で一番たくさん書物に取り上げられた人は、イエス・キリストといわれています。本に書かれたその数は、何百万冊になるか分からないと指摘されています。そして、二番目に多いのが、実はナポレオンなのです。ナポレオンについて書かれた本は、今日まで25万冊とも40万冊ともいわれています¹⁾。彼が活着しているときから本に書かれ始め、彼の死後、その数は一気に増え、今日でも平均すると毎月、数冊出版されています。その結果、ナポレオンについての本は、

キリストに続いて二番目に多いといわれているのです。この事をもってしても、ナポレオンという人が、極めて興味深い、多様な側面をもった人物であるということがわかんと思います。

ナポレオン自身、確かに数多くの戦争をしました。また、独裁的と思われるような政治体制もしきました。しかし、彼はそういうことを全部分かったうえで行ったのです。ナポレオンは、晩年、次のように語っています。

「この国民は1つの強力な政府を必要としていた。私が先頭に立って仕事をしてきた限りは、共和国を救うために1人の独裁者が必要であった時のローマのような状態にフランスはあった」²⁾、「数度の革命の後を継いだ政府、そして外部の敵に絶えず襲いかかられ、国内では陰謀によって動揺させられている政府は、どうしてもいくらか苛酷でなければならない。平和な時であったら、私はあの独裁をやめていたであろうし、憲法による統治を始めていたであろう」³⁾と。

内外の激動する状況のなかにあっては、敵を打ち払い、国内の安定をはかるためには、戦争や独裁もやむを得ないものだったのです。

したがってナポレオンは、もう1面ではこれからは戦争の時代ではない。未来は知性であり、産業であり、平和の時代である、とも強調していたのです⁴⁾。

このように、ナポレオンには、戦争好きの好戦的人物、あるいは独裁者、というような側面があるかもしれませんが、しかし、それは今の時代だから、そういうのであって、当時の激動の状況のなかにおいてはやむを得なかったことなのです。歴史は現在から過去を裁断することはできません。当時はどういう状況であったのか、当時の時代に降りていって、ナポレオンがなぜそうせざるをえなかったのか、そういう点を冷静に考えていくことが必要であると思います。

確かにナポレオンの戦勝それ自体にも目を見張るものがありますが、しかし、これからご紹介しますように、彼の残した業績は、戦勝の結果よりもはるかに素晴らしいものがあります。

パリの街に行ってみると目立つものが3つあります。一つは、古代ローマの遺産、二つ目は、ナポレオンの偉業、そして三つ目が、キリスト教の伝統です。この三つのものがパリには色濃く残っております。これら3つが合わさって、絢爛たる美しい都になっているのです。旅行をするときに、その地の歴史、その地の文化、そういうものを知ったうえで旅行するのと、そうでないのとでは同じ旅行でも味わいが全然違ってきてしまいます。その地に対する理解の深みが異なってきます。そういう意味で、パリの街を今後訪れるときには、古代ローマの遺産、ナポレオンの偉業、そしてキリスト教の伝統というものをぜひ知っておいていただきたいと思います。

2. ナポレオンの生涯

ここで、ナポレオンの生涯を概観しておきたいと思います。

ナポレオンは、1769年にコルシカ島で生まれました。コルシカ島というのは地中海に浮かぶ島で、日本の四国の半分くらい大きさです。当初はイタリア領でし

た。イタリアのジェノヴァ共和国という国の島でした。ところがコルシカ島の人たちは、独立心が強く、自分たちは「コルシカ人だ」と主張し、活発に独立運動を展開しました。あまりの激しさに、ジェノヴァ共和国も、「ええい、面倒くさい」「もう、手に負えない」ということで、1768年、フランスにその島を売っちゃいました。すなわち、ナポレオンが生まれる1年前に、コルシカ島はジェノヴァ領からフランス領になったのです。

250年以上前ですから、今日と状況が全然違いまして、ジェノヴァ領からフランス領に変わったからといって、コルシカ人がすぐにイタリア語からフランス語を話すようになったかといえば、そんなことは全くありません。たとえフランス領になったとはいえ、コルシカ人はずうっとコルシカなまりのイタリア語を話していました。ナポレオンはコルシカ島がフランス領になった1年後に生まれましたので、当然フランス人ではありますが、文化から言葉からあらゆる環境はすべてイタリア風でした。フランス語も話せませんでした。

1779年、ナポレオンが10歳の時、お父さんはナポレオンの将来のことを考えて「軍人にしよう」と、フランスのブリエンヌ幼年学校に入学させます。この時代、貧乏貴族が出世するには、軍人になることが手取り早かったのです。「軍の学校」といいますと、なんだか頭の堅い軍人を育成する所、というイメージが強いと思いますが、一般に当時は、軍人になることは知的エリートになることでもありました。軍事のことだけではなく、歴史、地理、数学、国語、文学、哲学などあらゆる学問を学んだのです。そのうえに軍事教練などがありました。

1784年になりますと、ナポレオンはパリの陸軍士官学校に入ります。そして1785年、砲兵士官になります。いわば軍人として名誉な大砲を撃つ一番下の下士官になったのです。

ところが1789年に大事件が勃発します。いわゆるフランス革命が起こったのです。これはまた後ほど詳しくお話しますが、このフランス革命がナポレオンの運命を大きく変えることになります。フランス革命がなければ、ナポレオンは平凡な一介の軍人で終わってしまっていたかもしれません。革命の激動の中で、ナポレオンは、王党派の軍人であったにもかかわらず、革命派について、フランス革命を支持する態度をとったのです。1792年になりますと、フランス革命を弾圧しようとヨーロッパの周辺諸国が反革命戦争を仕掛けてきます。フランスは保守的なヨーロッパ諸国との革命戦争に入るのです。ここで、ナポレオンは果敢に戦います。

1796年には、ナポレオンはフランス軍のイタリア方面軍最高司令官に任命になります。イタリアは、当時オーストリアの支配下にありましたので、そのオーストリア軍を打ち破るためにナポレオンは派遣されたのです。イタリアに出発する直前に、ナポレオンはジョゼフィーヌと結婚しました。

そして1799年、ナポレオンは、政治家たちが、何をやっても内外の危機を解決できない。その不甲斐なさを見て、たちあがります。すなわち、クーデターを起こして、政治の実権を奪ってしまったのです。自分が政治の指導者となり、フランスの内外の危機を乗り越え、フランス国家を再建すると決断したのです。それがブリ

ユメール 18 日のクーデターです。ナポレオンが 30 歳の時でした。このクーデターで、ナポレオンは第一統領に就任します。第一統領とは、今日でいう大統領にあたる应该说よいでしょう。

第一統領になったナポレオンは、めざましい活躍をします。フランス国家を再建するための手をどんどん打っていくのです。その詳細な事業は後にお話しますが、ナポレオンが、第一統領になってフランスは大きく安定していきます。

ナポレオンは、1801 年に宗教協約を結びました。これはローマ教皇と協定を結んで、「フランス革命はカトリックを否定したが、ナポレオンはカトリックを認める」と提案したのです。そのかわり、「ローマ・カトリック教会はフランス共和国を承認して欲しい」、という協定です。

1804 年には、3 月 21 日、民法典を制定します。民法の制定は、社会の秩序にとって大変に重要なことです。民法典を定め、その同じ年の 12 月 2 日、ナポレオンは皇帝に就任します。これは、フランスを 2 度と王政に戻さないということとナポレオンの権力は強大である、ということを示す意味をもっていました。

1806 年には、大陸封鎖を行います。大陸封鎖とは、イギリスをヨーロッパ大陸から締め出すための措置です。ヨーロッパ諸国はフランスを中心に一つにまとまるということ宣言したのです。

1809 年には、ジョゼフィーヌと離婚し、1810 年、オーストリア皇帝の娘、マリー・ルイズと結婚します。このころがナポレオンの絶頂期でした。フランスは広大な領土を持ち、ナポレオンは皇帝として思いのまま振る舞うのです。

ところが、1812 年にロシアに遠征し、そこで失敗します。躓くのです。ロシアが大陸封鎖を無視して、イギリスとの交流を継続していることを知り、こらしめようとしたのですが、できなかったのです。

さらに 1813 年には、「諸国民の戦争」(ライプツィヒの戦い)といひまして、オーストリア、プロシア、ロシアという国を敵に回して戦い、敗北する。その結果、1814 年に皇帝を退位しエルバ島に流されます。ところが、ナポレオンなき後の国王ルイ 18 世の復活の評判が良くないということを知り、彼は奮起し、1815 年にエルバ島を脱出します。そしてパリに入城し、再び皇帝に復位します。復位するや、今度は有名なワーテルローの戦いに臨みます。ワーテルローの戦いとは、イギリスとプロシアを敵にしての大戦争です。結果はナポレオンの敗北でした。彼は今度は、セント・ヘレナ島という大西洋に浮かぶ絶海の孤島に流されてしまいます。ナポレオンが、エルバ島を脱出し、1815 年 3 月パリに入り、皇帝に復位しますが、ワーテルローの戦いに敗れ、同年 6 月、退位します。この間 100 日なので、「百日天下」といわれています。セント・ヘレナ島で 6 年間の流刑生活を送った後、ナポレオンは 1821 年に 51 歳で亡くなります。

このように、ナポレオンが生きた時代は、今から 200 年前ほどのことです。200 年前の今ごろは、ナポレオンが民法典を定めて、その絶頂期に入っていたころです。以上が、ナポレオンの生涯についての概要です。

3. フランス革命とナポレオン

ところで、ナポレオンの業績を理解するためには、フランス革命について知らなくてはなりません。ナポレオンの歴史的意義が分からないといってもよいでしょう。そこで、少しフランス革命について話をしたいと思います。

フランスという国は、フランス革命が起きるまでは、国王がいて、その下に僧侶、貴族、ブルジョア階級がいるという厳格な身分制度をとる、封建的な政治、社会体制の国でした。とくにブルボン王朝と呼ばれる王政時代に、それは絶頂期をきわめていました。ところが、そのブルボン王朝がやがて財政的に行き詰まり、人々のその体制に対する不満が爆発しました。人々は「自由」、「平等」、「友愛」さらには「人権」という理念を掲げ、ブルボン絶対王政に対して変革を迫ります。そして、そのような封建的な国家体制に変えて、新しい国家の形をつくろうと試みました。これがフランス革命です。すなわち、フランス革命は封建的な国王の支配体制を転換して、新しい国民共同体をつくろうという試みだったのです⁵⁾。

この新しい国民共同体をつくるに際して、理念となったのが、すべての人間は「自由」であり、「平等」であり、「友愛」の観念を持たなければならない、という考えでした。とくに「人権」が尊重されなければならない、ということも強調されました。こうした考えのもとに、新しい国家、すなわち国民国家をつくろうとしたのです。これがフランス革命でした。

ところが、フランス革命は、その理想は大変に素晴らしかったのですが、現実には悲惨でした。「自由」「平等」「友愛」、「人権」という名のもとに、国王の首を切り、革命に反対する者、意見の違う者を次々と断罪していったのです。結果的に、政治は乱れ、経済は混乱し、社会秩序は滅茶苦茶になってしまいました。人々の心は激しく動揺したのです。すなわち、フランス革命は理想は立派でしたが、現実の社会は混乱につぐ混乱であったのです。

とくに、国王ルイ16世を処刑してしまった反動は大きいものでした。当時のフランスを取り囲むヨーロッパの国々は皆王制をしいていました。イギリス、プロシア、ロシア、オーストリア、そういう国々は皆国王の国でした。そのため、フランスで国王の首が切られたという情報がつたわってくると、「フランスはとんでもない」とフランス革命を潰そうとして激しい干渉戦争に力を入れてきたのです。このように、当時のフランスは、革命によって国内は混乱、諸外国からは干渉戦争というように、まさに、内憂外患の状態でした。国家滅亡の危機に瀕していたといってもよいでしょう。

こういう大変な状況を見ていたナポレオンは決意します。「これではもう駄目だ、何も状況を変えられない政治家たちにまかせておくことはできない」、と決断するのです。ナポレオンは軍人という立場を超えて、政治家としてフランスの安定、秩序の回復、対外的な安全保障に努めようと立ち上がったのです。そして混乱したフランスの社会を平定します。秩序を取り戻し、諸外国からの干渉戦争に対しても勝

利を収め平和を勝ちとっていくのです。

じつに、ナポレオンという人はフランス革命の中から生まれた、革命の落とし子、革命の継承者、革命の完成者といっても過言ではないと思います。ナポレオンがいたからこそフランス革命は成就し、完成し、新しい時代が拓けたといっても過言ではありません。

ただ逆にいいますと、もしフランス革命がなかったならば、ナポレオンの偉業はなかった。彼はただの平凡な軍人で終わってしまっていたかもしれせん。フランス革命が英雄ナポレオンを生んだのです⁶⁾。こう考えますと、フランス革命とナポレオンは、切っても切り離せない関係にあったといってもよいでしょう。革命という動乱、これを抑えたのがナポレオンです。ところが、その革命という動乱がなければナポレオンという偉大な人物は生まれなかったかもしれない。実に激動は人を生み、人は激動を乗り越えて新たな歴史をつくっていくものである、と思います。以上がフランス革命とナポレオンの関係です。

4. ナポレオンの台頭

それではもう少しナポレオンの幼少時代の頃をみてみましょう。ナポレオンはどのような幼少時代を送っていたのでしょうか。そして、彼はどのようにしてフランス革命という激動を通してのし上がってきたのでしょうか。ナポレオンの台頭について考えてみたいと思います。

ナポレオンは、前述したように、彼が生まれる1年前に故郷コルシカ島がジェノヴァ領からフランス領になりましたので、もともとはイタリア系といってもよいでしょう。事実、ナポレオン自身、当初はフランスのことにはあまり関心がありませんでした。故郷コルシカ島の独立ということの方に思いが傾いていました。

また、ナポレオンは、あまり軍人になるつもりもありませんでした。実際、ボナパルト家から輩出しているのは、弁護士とか商人であって、軍人はいないのです。ナポレオン自身、幼少の頃は、小説家になろうと思っていました。小説を書いたこともありました。すなわち、いいかえると、彼はおよそ軍人とか、革命を通して大政治家になるというようなつもりは全くなかったといってもよいでしょう。

ところが、そのナポレオンの運命を変えたのがフランス革命でした。フランス革命の中から、ロベスピエールなどの革命家が現れて、もう王制ではだめだ、フランスはこれからは、「自由」「平等」「友愛」「人権」などをもとにした共和主義的な国家にしなければならないと、主張したのです。

ナポレオンは幼少時代フランス語ができませんでした。友だちもあまりいませんでした。そのために彼はなんとかフランス語が上手になりたい、また、勉強がしたい、というわけで猛勉強に励むのです。とくに、歴史、地理、数学などが得意でした。読書に明け暮れていたナポレオンは当然、思想的にも革新的になっていきます。

とくに彼は、ルソーの『社会契約論』のような本に傾倒し、やがてそのうち、1791年から1793年にかけてロベスピエールらが台頭してくると、彼らに同調する

ようになります。だんだん共和主義になっていくのです。ルソーの思想、ジャコバン党の哲学、これらにナポレオンは傾倒していきます。こうしていくなかで彼は、やがて単に故郷コルシカ島の問題だけではなく、フランスをどうするかという大きな考え方を懐くようになっていくのです。

この変化の過程をみると、ナポレオンの台頭には4つの契機があったと考えられます。

第1に、ナポレオンの時代を読む目が優れていたということです。いわゆる先見の明があったといってよいでしょう。王制の時代は終わった。これからは、共和主義、自由主義、民主主義の時代である、というように時代の流れをナポレオンは見ぬくことができたのです。

第2に、人脈に恵まれたということです。ナポレオンは、フランス本土の身分の高い旧貴族の出身ではありませんでした。ということは、古い人的しがらみがなかったのです。むしろ新しい、革命を起こした人間との付き合いの方が強かった。例えばロベスピエールの弟と親しくしておりました。また革命家バラスに認められたりしました。そのうえでジョゼフィーヌという社交界に顔のきく、妻をもらったりしました。こういう人脈に恵まれて、ナポレオンは革命の激流とともに革命の中樞を担う人間と懇意になっていったのです。これがナポレオンを押し上げる力になったといえましょう。

第3に、彼は情報の使い方が非常にうまかったのです。すなわちイタリア方面軍最高司令官としてイタリアに行けば、たちまち新聞を発行してイタリアでの戦況をパリにどんどん伝えました。とくに自分がイタリアでいかに戦っているか、ということを知り伝えた。彼は情報のもつ力を知悉していたのです。言葉を変えていえば、情報を利用することによって、自分の名前を広め、人々の祖国フランスに対する愛国心を高揚させたのです。ナポレオンは、人々の間にたちまち人気を博していきました。情報とスピードによる自分の売り込みが大変に巧妙であったということが彼を一躍有名にしていきました。

第4に、彼の理想、大志、ないしは夢がどんどん膨れ上がっていったということです。彼が若き日、フランス語が思うように話せなかったため、読書に没頭していた。その読書の中からアレキサンダー大王、ジュリアス・シーザー、さらにはシャルルマーニュ大帝のことを学び、やがて、自分も世界をリードしていく大人物になるんだという彼の理想とか、大志とか、夢というものが非常に大きくなっていったのです。この内発的な力が、ナポレオンを大人物に仕立てあげる大きな原動力となったといえましょう。

以上の4つが、革命の中からナポレオンをフランスをひきいていく大リーダーに育て上げていった理由といえます。繰り返しますと、時代の動向を読む確かな目をもっていったということ。人脈に恵まれたということ。情報を巧妙に利用したということ。そして、理想、大志、夢というものを大きくふくらませていったということ。これらが英雄ナポレオンを生む土台になっていたと思うのです。

一介の軍人から、ナポレオンは革命の中でその頭角を現し、やがて1799年11月、

クーデターによって、政権を奪取し、第一統領という立場につきます。そして、ついには皇帝の地位へとかけあがっていくのです。ここで顕著なことは、ナポレオンは皇帝になる以前に、すなわち、第一統領の時代に、かなり重要な仕事をしているということです。革命の混乱を終わらせ、共和国としての安定をはかったのです。とくに、次の2つのことが重要です。

5. 革命後のフランスの安定

第1に、宗教協約の締結（1801年）。第2に、民法典の制定（1804年）です。前者は、人々の精神的な安定をはかり、後者は、世俗的な調和をもたらすうえで大きな貢献をしたといえましょう。

では、第1の、宗教協約のことから説明していきます。

前述したように、フランス革命はルイ16世を中心とする王制という体制を覆す戦いでした。王制を支えていたのはキリスト教に基づく王権神授説という思想でした。王権神授説とは、簡単にいうと、キリスト教を信じ、それで救済されるには、世俗的には国王に忠誠を尽くすことが必要である。神は、世俗の統治を国王に託したからである、というのです。それが結果的にキリスト教による王権の強化につながります。こういう考えにフランス革命は「ノー」といったのです。国王に尽くすことが、キリスト教に奉仕することにはならない。国王に仕えても神の救いを得られるとは限らない、と人々は主張しました。したがって、王制を否定することは精神的な側面からいいますと、その支柱をなしていたキリスト教に対する否定でもあったわけです。

そのためフランス革命が激化しますと、革命政府は教会の財産を没収してしまいます。僧侶も弾圧します。同時に、国王を支えていた貴族も迫害します。教会の僧侶とか貴族とかは、革命政府の圧迫から逃れるため、多くが国外に亡命してしまいました。これがフランス革命でした。ナポレオンは政権をとった時、まず考えたのは革命政府が追放した僧侶や貴族をどうするか、ということでした。

革命政府は僧侶や貴族から没収した教会財産や土地を分割して農民に安く売ってしまいました。農民にしてみれば革命によって、これまで僧侶や貴族がもっていた土地を手にすることができたわけです。そのため農民たちは、キリスト教が弾圧されたことは不満でしたが、自分たちが土地をもてるようになったことには満足しました。

ところが、革命後の社会は安定せず、結果的にナポレオンが政権をとりました。すると農民たちは当初、不安にかられます。せっかく自分たちが手に入れた土地を、ナポレオンによって取り上げられてしまうのだろうか、と懸念するのです。実は、この問題は、ナポレオンにとっても大きな課題でした。革命の中で、教会や貴族から、農民に分け与えられた土地はどうすればよいのか、また、追放された僧侶や貴族たちをどう処遇すればよいのか。ナポレオンは思案します。

その結果、ナポレオンは一つの決断を下します。それは、革命によって得た土地

を、再び農民から取り上げることはしない。農民の所有を保証します。そして、外国に亡命した僧侶や貴族に対してこれ以上弾圧することはない、と帰国を促します。ナポレオンは、僧侶、貴族、農民というすべての階層の人々に安心感を与える政策をとるのです。

とくにナポレオンは宗教に対して気を使います。農民はフランス人口の75%を占めている。その農民のほとんどがカトリックの信者である。キリスト教を信じている75%の農民にキリスト教徒であることをやめよというのは、非現実的である。そこでナポレオンは、カトリックの信仰は認めよう。ただし、かつてのルイ16世の時代のような国教にはしない。「フランス人の大多数」の宗教である、「フランス人の大多数」の宗教がカトリックである、とその存在をナポレオンは認めたのです。と同時に、カトリックは認めるから、ローマ・カトリック教会はナポレオンのフランス共和国を国家として承認しなさい、と要求したのです。このようにナポレオンがローマ教皇ピウス7世と和解した協約を「宗教協約」(コンコルダート)といいます。1801年のはじめのことです。カトリックを弾圧しない、それは「フランス人の大多数の宗教」である、と認める。そのかわりローマ・カトリック教会はナポレオンのフランス共和国を承認する、ということによってキリスト教との和解を図ったのです。これによって、フランスのカトリック信徒は精神的な安定をえることができるようになりました。革命の時は、カトリックは否定されたが、ナポレオンになって信仰することが保証された。ここに、人々は安心感をもつと同時に、フランス国民として精神的な統一を図ることができるようになったのです。

第2の民法典の制定についてお話しします。

フランス革命は「自由」、「平等」、「友愛」、「人権」をその達成すべき理念として掲げました。問題はそれを政治、経済、社会の各分野でいかに具体化していくか、ということです。ナポレオンはこの革命の理念をふまえた民法典の完成に取り組んだのです。それは、1804年3月31日、完成します。

民法とは人々の私生活上の決まりであり、ルールです。これをきちんと体系化し、整備することが人々の社会生活の安定に寄与します。ナポレオン以前にも民法はありましたが、それは地方や地域によってバラバラでした。革命政府はそれを統一しようとしたのですが、完成には至りませんでした。ナポレオンが、それに挑戦したのです。彼は民法の中に革命の理念を取り入れ、家族とか、結婚の形態とか、人々の社会生活を統一あるものにしました。この民法典の完成によって、フランス人の世俗面での生活の安定が達成されたのです。

このようにナポレオンは、宗教協約によって人々の精神的な統一を図り、民法典によって人々の世俗生活面での安定を可能にしました。この二つによって、ナポレオンはフランス革命がもたらした混乱を、精神面と世俗面から收拾することに成功したのです。

この二つを達成したうえで、1804年5月18日、ナポレオンは皇帝に就任し、同年12月2日に皇帝の戴冠式を挙行します。そして1807年から1810年にかけてフランスの領土は最大に広がり、ナポレオン帝国は絶頂期を迎えたのでした。

6. ナポレオンと独裁制

では、次にナポレオンはなぜ強権的、あるいは独裁的ともいえる体制をしいたのか、また、しかざるをえなかったのでしょうか、この点について、当時の時代にさかのぼって考えてみることにします。

第1に、当時の状況というものがあります。

当時は、フランス革命の勃発によって社会が大混乱しておりました。フランス革命は、「自由」、「平等」、「友愛」、「人権」という思想を理想として掲げておりましたが、しかし現実には、それまでの王制を倒してしまったわけですから、もう社会は破綻し、政治は乱れ、経済は無茶苦茶になってしまいました。人々の生活は、混乱の極みに達してしまうのです。

こういう状況を前にして、ナポレオンはその混乱を立て直すためには、強力な力を発揮せざるを得ない。強い力で社会秩序の回復を図ろうとするのです。そうでなければ、政治体制は脆弱で機能しなくなってしまいます。しかし、そのようにしながらも、ナポレオンは革命の理念の定着化を試みます。強権を発揮しながらも、民主的な措置を講じていこうとするところにナポレオンの統治の特徴があります。

当時の状況を考えれば理解できると思いますが、とにかく混乱している社会の中で、その秩序を回復し、維持するためには、強力な力を発揮し、安定を確保するしか確たる展望は拓けなかったのです。

第2に、ナポレオンは強力な力を発動しながらも、この力は自分自身の野心に因るものではない。あくまでも人民の意思に基づいて、人民の意思の負託を受けて成立しているものである、ということを強調します。すなわち、権力の正当性の淵源を、人民の意思に求めたのです。

ナポレオンは、クーデターによって権力を奪取し、新憲法を定めて第1統領に就任した時、それが正当であるかどうか人民投票に諮ります。人民投票を行って、国民から自分が権力を取得することの承認を取り付けるのです。その結果、彼は圧倒的多数の人々から賛成をえて、権力保持の正当化をはかるのです。

その後にナポレオンは終身統領になることを提案します。そのときも、このことを国民は認めるかどうか国民に諮ります。人民投票にかけるのです。国民はまたも、ナポレオンの終身統領に対して圧倒的多数をもって「賛成」を表明しました。1804年に皇帝になった時も、人民投票で国民の支持を取り付けました。

このように彼は、強権を発動する必要があったのですが、その際、それは必ず人民の意思に立脚したものであるという手続を踏んで行ったのです。

第3に、軍事的勝利です。

ナポレオンは次から次へと戦争を行いました。ただ、その戦争の理由をみると、段階的に3つの性格を持っていたことがわかります。

第1段階の初期の頃の戦争は、防衛戦争でした。すなわち、フランスやナポレオンが仕掛けた戦争ではありませんでした。フランスに革命が起こり、王制を倒そう

とした。そのため、王制をしく保守的な周辺諸国がフランス革命をつぶそうと戦争を仕掛けてきたのです。フランスとしては革命を守るため、やむなくそのような諸国からの挑戦をはねのけなくてはならなかった。戦いをせざるをえなかったのです。これが第1段階の戦争の性格です。

第2段階の戦争は、ナポレオンがフランス革命の理念を諸外国に広め、フランスの版図を拡大しようとしたところにその特色がありました。そのため、この段階での戦争は、むしろナポレオンが積極的に仕掛けたといってよいでしょう。防衛戦争から侵略戦争に転化したといえるかもしれません。

第3段階の戦争は、再び諸外国からの攻撃戦争という形になります。ナポレオンは平和を維持しようとしませんが、オーストリア、プロシア、イギリスなどの国がナポレオンの支配を許しません。和平交渉を一方的に破ってナポレオンを攻め落とそうとしたのです。統一したヨーロッパという形をとるナポレオンの帝国構想に、ヨーロッパ諸国は、激しく反発し、ナポレオンを倒そうとしたのでした。

このように、一口にナポレオン戦争といっても、彼が積極的に行ったものばかりではなく、むしろ回りから仕掛けられたものも多かったという、多面的な性格があったといえましょう。しかし、戦争の性格がどのようなものであれ、ナポレオンがそれらに打ち勝っていったことが、ナポレオンの支配を正当なものとする、権力基盤の強化につながっていったことは否定できません。

ともあれ、以上のように国内体制の強化をはかり、諸外国からの干渉をはねのけるために、ナポレオンがとっていた、一貫した姿勢がありました。それは「強くあらねばならない」⁷⁾、「強くなければフランス革命は失敗に終わってしまうし、ましてや革命の理念でもって世界を引っばってゆくことは出来ない」ということです。ナポレオンはいつでも、「強くあること、強くあることが世界をリードする秘訣である」と。

そしてこれは、皮肉なことなのかもしれませんが、ナポレオンは戦争を通してフランス革命の理念を世界に広めていきました。また、軍事的な勝利を重ねることによって、ナポレオンはフランス国民に初めて、「われわれはフランス国民である」という国民の誇りを持たせることに成功しました。すなわち、現代的な言葉でいえば、フランス国民が初めて「我々はフランス人である」というナショナリズムの意識に目覚め、愛国の情に燃えて、フランス国家を発展させていこうとしたのです。このように、フランス革命の理念はナポレオンによってヨーロッパに広まり、また、彼の戦いによってフランス国民はナショナリズムという一体感をもつことができるようになったのです。

ナポレオンがなぜ独裁的ともいえるその体制をしいたのか、また、そこから何が生まれたのか、ということについて述べてまいりました。まとめますと、それは、1つに、当時の状況があったこと、2つに、人民の意思を尊重しながらその強大な権限を確立していったこと、3つに、軍事的な勝利とその勝利を通じての革命の理念の世界への浸透をはかったこと。また、フランス国民に誇りを持たせ、ナショナリズムの観念を高揚させていったこと、以上の3点があったということを確認して

おきたいと思います。

7. ナポレオンの敗北

それでは、ナポレオンがいよいよ諸国民の戦争において負けていくわけですが、その敗北の原因がどこにあったのか、これを次にみておきたいと思います。ナポレオン体制破綻の原因とでもいえましょう。

第1に、ナポレオンの躓き、その原因はなんといってもイギリスとの競争に勝てなかったことにあります。イギリスとの競争、これはフランスの永遠のテーマでもありました。すなわち、英仏百年戦争以来、イギリスとフランスは天敵の関係にありました。ある時はイギリスが勝ち、ある時はフランスが勝利しました。ジャンヌ・ダルクの時代はフランスが勝ちましたけれども、その後はまたイギリスが勝利して、ナポレオンの時代に入ります。イギリスはフランスよりも一世紀以上も早く、17世紀には産業革命を達成していました。そのためイギリスは大変な経済力と工業力を持っていました。軍事力、特に海軍力には優れたものがありました。経済力と工業力に勝るイギリスにフランスはどうしても勝てませんでした。ナポレオンはかなり強かったのですが、どうしてもイギリスとの戦いには勝利できませんでした。これがナポレオンの命取りになるのです。

第2に、スペインに出兵して、スペインの内政に干渉したことです。これがまた、ナポレオンにとっての大きな躓きになります。ナポレオンはスペインを甘く見くびっていたのです。スペインの内乱干渉に足を取られたことが、ナポレオンの敗因の出発になります。

第3に、オーストリアとプロシアのしぶとさです。何回も何回もナポレオンはオーストリアとプロシアと戦争をやってその都度勝つんですが、その両国を完全に敗北させることはできませんでした。ある戦闘では勝利しても、この両国は粘り、最後はイギリスと組んでナポレオンを打ち破ってしまうのです。

第4に、ロシアの存在です。ロシア攻略の失敗がナポレオンにとって、大きな命取りになるのです。ナチス・ドイツが、ソ連を陥落させようと侵攻しますができませんでした。これとやや似ているのがナポレオンのロシア遠征の失敗です。ロシアはナポレオンの大陸封鎖を破り、イギリスとの交易を始めます。その制裁として1812年、ナポレオンはモスクワに遠征します。しかしそれは、失敗に終わりました。このロシア遠征の失敗が、ナポレオンにとって非常に大きな痛手となったのです。

第5に、これは大変に皮肉な問題です。ナポレオンは諸外国に、「自由」、「平等」、「友愛」、「人権」の理念を教えていくわけですが、その結果、諸国家が逆に、「自由」、「平等」、「友愛」、「人権」、さらに「ナショナリズム」の意識に目覚めてナポレオンに抵抗するようになってきました。すなわち、ナポレオンにしてみれば、自分の教えた理念によって、逆に自分が反抗されるという皮肉な結果に陥ってしまったわけです。

第6に、ナポレオンの個人的な問題です。ナポレオンが40歳を過ぎ、体力が衰

えていくにしたがって、決断力、判断力が鈍ってまいります。若き日のナポレオンは、即断・即決でもって戦いを進めていました。しかし、体力や気力が衰えていくとそうした力も鈍ってまいります。それはやがて、ナポレオンにとって命取りになるのです。例えば、ロシア遠征、ワーテルローの戦いの敗北なども彼の判断力の鈍さに原因があったのではないかといわれております。

第7に、ナポレオンの戦闘方法です。かつて戦場が山間部などで狭いときは、ナポレオンの戦い方は、大変有効でした。一点突破、全面展開という戦闘方法は実に効力を発揮しました。しかし、だんだん戦域が平野などに広がっていくと、これまでの方法では通用しなくなっていきます。また、彼の戦い方も、敵に見抜かれてしまうようになりました。このようにいくつかの条件が重なって、ナポレオンはやがて滅びていったのです。そして流刑となり、セント・ヘレナ島で6年間を過ごし、1821年5月5日、その生涯を閉じました。

8. セント・ヘレナ島でのナポレオン

ところが、ナポレオンの凄惨なところは、セント・ヘレナ島での6年間の生活です。ナポレオンはただじっとして、何もやっていなかったわけではありません。セント・ヘレナ島への流刑が決まったときから、彼は自分自身の生涯と足跡を口述筆記させ、回顧録を発表していくのです。自分がなぜ多くの戦闘をしたのか、自分がどういう業績を残したのか、そうした自身の生涯を綴った記録を残していくのです。それは「セント・ヘレナ日記」という形の本になり、彼がセント・ヘレナ島にいるときから、フランスなどでベストセラーとなり、多くの人々に読まれていきます。

そしてそれは、ナポレオン死後19世紀において、「ナポレオン伝説」という形になっていきます。「ナポレオン伝説」はフランスのみならず世界を席卷し、19世紀はナポレオンの時代といわれるまでになります。ナポレオンを主題とした小説、文学、詩、そのようなものが次ぎから次ぎへと現れたのです。このような状況をみて、フランスの19世紀の文学者シャトー・ブリアンは次のようにいいました。

「ナポレオンは、生きていたときには世界を支配できなかった。しかし、死んでからは世界に君臨した」⁸⁾ (ティエリー・レンツ『ナポレオンの生涯』) と。

このような言葉に代表されるように、ナポレオンは生きていたときは、現実にヨーロッパのほとんどの国々を支配しましたが、世界を制覇するまでには至りませんでした。しかし、死んでからは、19世紀はナポレオンの世紀になり、さらに彼の名前は全世界に浸透していきました。こういうところから、シャトーブリアンは「ナポレオンは死んでからは世界に君臨した」といったのです。事実、ナポレオンが残した遺産は、今日においても燦然と輝いているといっても過言ではありません。

以上、ナポレオンの生涯をフランス革命という時代の激動と関連させながら述べてまいりました。そこで次ぎに、それでは一体ナポレオンはどのような業績を残したのか、その主なものを紹介したいと思います。それをみると、ナポレオンという人は、単なる軍人ではなく、実は政治家として、ときに行政官として、産業・文化を

中心に今日にまで残る大きな業績を築いてきたということがおわかりいただけると思います。

9. ナポレオンの業績

ナポレオンはフランス革命に対して「革命は終わった」と宣言しました。すなわち「自由」、「平等」、「友愛」、「人権」の理念を掲げて行われた革命は終結したとしました。これは何を意味するかといいますと、革命のもたらした混乱、社会不安、あるいは諸外国からの干渉、そういうものはなくなる、これからは安定した社会になるということをさしております。こういう意味を込めて、ナポレオンは「革命は終わった」と宣言したのです。

そして彼は、「人権宣言」がかけた人民主権というのは単なる原理ではない。本当に人民のための政治というのが行われてこそ人民主権原理が実現されることになる。このようにナポレオンは断言し、革命後の混乱した社会の中から、人民のための新しい国家の建設に取り組んでいったのです。ここでナポレオンは、後世に残る業績を上げるのですが、今からその主なものをみていきたいと思います。

(1) 社会的融和

第1に、「社会的融和」をはかったことです。すなわち、フランス革命は人々の間に亀裂を生じてしまいました。また、階級間の激しい対立を引き起こしました。王制の時代は、国王がいてそのもとに僧侶、貴族、ブルジョワ階級がおりました。このように階級や身分がはっきり分かれておりましたが、それなりの安定は保っておりました。ところが、フランス革命はそのような身分秩序を破壊し、階級間に強烈な亀裂をもたらしました。自由、平等、友愛の理念のもと、僧侶を迫害し、貴族を弾圧し、また革命に異を唱える人々を殺戮しました。その結果、人々の間に不信と憎悪、対立と敵対の気持ちを引き起こしてしまったのです。社会は大混乱に陥りました。ナポレオンはこうした分裂状況の修復に取りかかったのです。

すなわち、僧侶や貴族に対しては、もうこれ以上弾圧はしないのでフランスに戻ってくるように促します。急進的なブルジョア階級には、これ以上の流血の惨事は認めない、特権階級に対する弾圧は禁止すると制止します。そのかわり、所有権を保証します。また、革命によって土地を得た農民達に対しては、その土地を取り上げることはしないと安心してさせます。このように、社会のあらゆる人々が、ナポレオンは、社会のあらゆる階級、階層の人々に対して満足感を与えてくれると満足します。各階級や階層の人々が、ナポレオンによって、恐怖とか、不安を解消され、納得のいく利益をそれぞれ得ることになったのです。実に、ナポレオンの各階級や階層の利益を、調和をはかりながらまとめていく力量というものは大したものといえましょう。

しかもナポレオンは、新国家建設のための人材登用方法においても、新機軸を打ち出します。それまでの「貴族だから」、優秀な「僧侶の関係者」だから、という

ような家柄、血筋、遠戚とかそういうものによって人材を用いることをいっさいしませんでした。彼は、あくまでも能力主義、功績主義で人を取りたてました。これを「メリット・クラシー」(能力・実力主義)といいますが、こういう方法を採用したため、ナポレオンの周りには優秀な人材が集まってきたのです。特に、将軍の登用には、大胆なコルシカ人の気性からか、役職、立場にかかわらず優れた人物を果敢に登用したといわれています。一説には、17人がナポレオン時代に、一介の兵士から王、元帥、公、将軍にまでなると指摘されています。

また、フランスの最高の勲章として「レジョン・ドヌール」勲章というのがあります。「レジョン・ドヌール」。レジョンとは軍団、ドヌールとは名誉の。すなわち「名誉の軍団」という意味でありますけれど、この「レジョン・ドヌール」勲章という制度を定めたのも、ナポレオンです。彼は国家の発展に功績があった官吏、軍人、さらに民間人を問わず、すなわち、一切の階級、官職にとらわれずに、国家の発展に功績があった人に勲章を授けるという制度を設けました。これが、誇り高いフランス人の虚栄心をくすぐりまして、人々に国家発展のために尽くす気持ちを起こさせました。あらゆる人々が気持ちを一つにして社会の進歩に貢献しようと団結するようになったのです。

このようにナポレオンは、階級間の対立、あるいは階層間の亀裂、そういうものを修復すると同時に、人材の育成と登用、そういう側面におきましても巧みに平等、公平な方法や人間の心理を巧妙に操作する手段を導入して社会の融和を図っていったのです。

(2) 政治体制の安定

第2に、ナポレオンは「政治体制の安定」をもたらしました。これは、第1の「社会的融和」と通ずるものがあります。社会の融和がはかられたために、政治も安定しました。その際ナポレオンは、特に「世論」を重視します。彼は世論をまとめるのに古代ローマ時代に行われていた、いわゆる「人民投票」という方法を採用します。自分がクーデターを起こした後、彼は憲法案を作りその承認を人民投票に求めます。実質的には、自分のクーデターを認めてくれるかどうか、人民に諮るのです。また終身統領になる時、それを承認してくれるかどうか、それも人民投票にかけます。さらに自分が皇帝に就いた際、人々はそれを認めてくれるかどうか、人民に求めました。このようにナポレオンは、人民の意向である世論を重視し、そこに、自分の権力の正統性の基盤を定めようとしたのです。そうすることが、政治体制の安定につながると考えていました。彼は、革命の理念である民主主義を継承するという立場をとっておりましたから、世論の支持による政治体制の確立に心を配っていたのです。

(3) 宗教政策

第3に、宗教政策です。これも前述しましたが、ナポレオンは宗教を重視していません。彼自身は宗教は信じませんでしたが、宗教のもつ力は高く評価していたの

です。そのため彼は、巧みな宗教政策をとりますが、その背景には次の2点がありました。

1つには、彼は現実をよくみていたということです。フランス国民の75%は農民であり、そのほとんどがカトリック教徒である。この現実を無視することはできない。すなわち、カトリックを尊重することが国民生活の安定につながるという現実的な判断がナポレオンには働いていたのです。宗教は体制の安定にとって不可欠であるとの読みがナポレオンにはありました。

2つめに、彼自身の宗教観は、「宗教は魂の休息であり、希望であり、不幸な人々の頼みの綱である」⁹⁾、「宗教は社会秩序の神秘である」¹⁰⁾、というものでした。そのため、宗教、とくにカトリックを大事にしました。だからといって、カトリックを昔のように政治権力と結びつけることはしませんでした。カトリックを強大化させませんでした。その結果、ナポレオンがとった政策は、カトリックを「フランス人の大多数の宗教」とする、というものでした。国教にはしないが、カトリックを公の宗教として認めたのです。信教の自由の保障です。

この措置に理解を示したローマ教皇は、ナポレオンのフランス共和国を国家として承認しました。これを「宗教協約」といいます。そして、ナポレオンはカトリック教会を政府の管理下に置き、聖職者には政府が給与を払うという形にしました。

ナポレオンのこのような宗教政策には、もちろん一つの計算が働いていました。カトリック教会を政府の管理下に置くことによって、それがかつての保守派、王党派と結びつくことを遮断したのです。ともあれ、こうしたナポレオンの巧みな宗教政策によって、国民は安心してカトリックの信仰に励むことができたのです。

しかもナポレオンは、カトリックだけにこうした措置を認めたわけではありません。彼はキリスト教のプロテスタントに対しても自由な信仰を認めたし、ユダヤ教に対しても宗教の自由を保障しました。さらに、イスラム教に対してもナポレオンは寛大な措置を講じました¹¹⁾。彼がエジプトに遠征したとき、彼は部下に対してイスラム教徒を弾圧してはならない、イスラム教徒が信じている宗教をそのまま認めなければいけない、と忠告しました。ナポレオンの兵士のなかには、イスラム教に改宗するものさえいたといわれております。じつに、各宗教とも、こうしたところから、ナポレオンに対して多大な信頼を寄せるようになりました。

このようにナポレオンは、一面では、強大な権力を発動しましたが、反面では、信教の自由、文化の共存を容認しました。多様性や人間の協調を重視したのです。こうしたことが、ナポレオン体制への人々の精神的な統合を図るうえにおいて、大きな役割を果たしたのでした。

(4) 民法典の編纂

第4に、「民法典の編纂」です。これも前に少し述べました。ローマ・カトリック教会との和解、また信教の自由を認めたことで、ナポレオンは人々の精神的安定を図ることに成功しました。それに対して今度は、民法典を定めることによって、人々の世俗的な一体感をもたらしたのです。民法典を編纂したことは、ナポレオン

の業績の中でもひとときわ輝きを放っております。すなわち、新しい民法典によって、それまでの封建的でバラバラなものを、民主的な、しかも統一あるものにしましたのです。すなわち、民法典の制定は、世俗面で人々の生活形態を一体化させたといっても過言ではありません。民法典は、人々の生活面から、国家の安定をはかるのに欠かせないものだったのです。

ナポレオンは、この民法典の編纂に大変力を入れました。民法典が完成するまで、102回もの審議会が開かれましたが、彼自身57回もその会議に参加し、さまざまなことを取り決めていったのです。そして、1804年3月21日、2281条からなるフランス人の民法典が公布されました。それをもって同年5月18日、ナポレオンは皇帝に就任し、同12月2日、盛大に皇帝戴冠式を挙行了たのです。

民法典では封建的な制度や慣習が廃止され、私的所有権の絶対や個人の意見の自由、家族の尊重というものを基盤に社会の仕組みが組み立てられるとしました。とくに財産権、所有権が強調され、結婚には民事婚が認められました。すなわち、教会を通さなくても結婚ができるようになり、また離婚も許されました。ただ家族の形態はしっかりと維持するように取り決められました。このように、ナポレオンの民法典の制定によって、革命の原理が具体的に人々の生活の中にまで浸透していったのです。民法典は、「自由」、「平等」という理念を人々の日常生活次元で具体化したといえるでしょう。

この民法典は、内容の精緻さはもちろん、文章も流麗でナポレオン自身その完成に大変に満足しました。そして後に、1807年、この民法典は「ナポレオン法典」と命名されました。このナポレオン法典の与えた影響は大変に大きく、世界70カ国に影響を与えているといわれております。すなわち、ヨーロッパではイタリア、オランダなど35カ国の民法典に影響を及ぼし、さらに中南米の諸国など35カ国の民法典はナポレオン法典をもとにしているといわれております。

実は、わが国は明治時代になって不平等条約を改正する交換条件として、民法を制定するように諸外国から要求されました。明治3年のことです。この過程においてナポレオン法典が検討されます。フランスからボワソナードという民法学者が招かれまして、ナポレオン法典をふまえたうえで、それ以上に解釈のレベルの高い民法典ができたのです。ところがこの民法典は、日本の国情に合わなかったのです。その民法は一夫一婦制を定めておりました。すなわち一人の男性は一人の女性しか妻にしてはいけない、というものです。厳格な一夫一婦制だったのです。ところが明治時代の議員たちは、たいがいお妾さんがいたのです。実質的に、一夫一婦じゃなかったのです。だから当時の議員たちは、こんな厳格な一夫一婦制にされたら妾がもてない、ということで、これは採り入れるのはやめようと主張しました。一部の新聞には、穂積八束の論文のタイトルである「民法出でて忠孝亡ぶ」¹²⁾という言葉まで報道されました。結果的に、明治23年の春に、太政官布告で一方的に民法が制定されましたが、しかし、招集された帝国議会で、明治25年に民法施行延期法律案が可決されてしまったのです。このように、日本では、フランス民法は実施されませんでした。しかし長い間、ナポレオン法典を検討したりして、日本の民法

にも、フランス民法の影響があったことは事実です。

以上、先にもふれましたが、ローマ教会との和解によって国民の精神的統一が図られ、民法典の編纂によって国民の世俗的な統一が果たされました。実に、「宗教協約」と「民法典の編纂」という二つの業績は、革命後に、新たなフランス国家を創造するためのナポレオンの数ある業績のなかでも際だったものであるといつてよいでしょう。

(5) 行政官僚機構の整備

第5に、ナポレオンは行政官僚機構を整備しました。国家は行政官僚機構がしっかりしていなければ成り立ちません。ナポレオンは、フランス革命で混乱してしまった国家を立て直すために、行政官僚機構の整備を図りました。

彼は、単一不可分のフランス国家を形成するために、1800年2月17日、「ブリュヴィオーズ28日の法律」という法を制定し、国家行政の中央集権化を試みました。それによると、中央政府があり、その下に地方自治体が置かれ、中央政府の任命によって地方自治体の県知事や市町村長が決まっていくという形に整備されました。また、警察機構も強化され、国内の治安維持が格段と進みました。この行政官僚機構と警察機構の整備により、フランスの国家体制は見事に立ち直ったといっても過言ではありません。こうした意味で、ナポレオンは近代官僚制度の生みの親であるといわれ、また、ナポレオンの時代ほど行政がスムーズで仕事が熱心に行われた時代はなかった、と評価されました。それほど、ナポレオンの行政官僚機構の整備はうまくいったのです。

一般的に、「官僚制」といいますと、悪いイメージで受けとられるといつてよいでしょう。「官僚の腐敗・墮落」とか、「官僚制の硬直化」などと批判されますが、しかし、近代国家というものが成立するためには、官僚制度がきちっとしていないと成り立ちません。官僚制をなくしてしまうと国家は機能しなくなってしまうのです。官僚制というのは、ある意味では、非常に重要な役割を果たします。ナポレオンは国家の安定と発展のために、行政官僚機構をしっかりと確立したのです。

(6) 教育の充実

第6に、教育の充実です。ナポレオンは、国家の発展にとって重要なのは、人材の育成であり、それには教育の充実が欠かせないと考えます。絶対王制の時代、教育は主としてキリスト教を中心とした道徳教育が中心でした。ナポレオンは、革命政府の方針をくみ、これからの近代国家の教育はそのようなキリスト教による教育ではなく、新たな「自由」、「平等」あるいは「民主主義」という理念を基にした公教育を行わなければいけないと考えました。そのため、教育権を教会から取り上げ、国家の下に置き、国家のために尽くす優秀な人材を育成するように教育制度を確立していきました。

少し当時の時代状況を考えてみます。フランス革命以前は、国王を中心とした王制の時代でした。その王制を強化するためには、キリスト教による教育が大事でし

た。というのも、キリスト教による教育では、国王に仕えること、国王に忠誠を尽くすことが、神に救われる、という内容でした。すなわち、王権を強化するために、キリスト教と一体になった教育が必要だったのです。ナポレオンは、革命政府が手がけた王権を強化するための教育から、国家を建設するための教育へと方向転換を強力に推進しました。とくに「自由」、「平等」、「友愛」という理念を基にした近代国家を担う人材を育成するのが公教育であるとし、それに力を注いだのです。

彼は、第1統領時代からの3年間で4500の小学校、750の中学校、45の高等中学校などを作ったといわれています。

ナポレオンがなかでも力を入れたのが中等教育とエリート教育でした。彼はそこに焦点をあてました。彼は国家を担って立つ人材を育成するには、中等教育とエリート教育が大切だと考えたのです。

ここで少しエリート教育について述べておきます。今日のフランスでもそうですが、この国はエリート教育に力を入れています。日本では小学校・中学校・高校・大学とあり、大学が一応エリート育成の場であるといわれております。しかし、実態は大衆化しており、エリート教育が行われているとはいえない実情にあります。ところがフランスでは、大学とは一般の人が勉強したいから行くところであって、決してエリート育成の場ではありません。大学は政界や財界の発展を担う力のある人材を育成する場ではないのです。フランスの大学はあくまでも勉強したい人が学ぶところといってよいでしょう。それでは、いわゆる官僚とか、トップ経営者とか、そのようなリーダーはどこで育てるかという点、「グランゼコール」(大学校)というエリート校においてなのです。フランスの場合、中学・高校を終えたら「バカロレア」という大学入学資格試験を受けます。その試験の成績の良い人が特別の予備校で勉強し、そこで優秀な人が「グランゼコール」ごとの試験を受けて、合格したら入学できるのです。この学校を卒業したら、若くして政界、財界の中樞になります。フランスは、このような徹底したエリート教育を行っているのです。

こうしたエリート教育の基盤をつくったのがナポレオンであるといえてよいでしょう。ナポレオンはグランゼコールの活性化に力を入れ、とくに1808年3月17日、バカロレアという大学入学のための特別試験を制定したのです¹³⁾。これは一例ですが、ナポレオンは国家の発展を担うのは人材であるとの強い考えの下、教育制度の整備に力を入れたのでした。

また、ナポレオンは、1808年、帝国大学令というものを出しました。これはいわゆる大学ではなく、文部科学省のようなものでした。大学教育の内容、教師など、すべてを統一的にしなければならない、としました。大学教育もまた、きちっと整備を図ったと同時に、国家の統制下においたといえましょう。

なお、ナポレオンは女性についてはエリート教育は好みませんでした。ナポレオンはお母さん子で、女性に育てられたという側面が大変強かったことで、女性があんまり知的になることや、高度な教育を受けることは好みませんでした。女性で大切なのは母親のように情が深く、子どもをたくさん産んで、育て、家庭の面倒をみることに。それが女性の役割であり、こういう女性を育てることが大切であると考えて

いました。ナポレオンのこうした女性観は、今の時代からみますと、やや古いといえましょう。彼は、理想的な女性というのは自分の母親のように子どもをたくさん産んで育てる家庭的な女性である、とっていました。良妻賢母型の女性を理想として、女性教育のためには産婆の養成所の充実に力を入れたのです。

(7) 経済発展

第7に、経済発展です。これは宗教協約、民法典と並んでナポレオンが最も力を入れたものです。ナポレオンの考えには、「イギリスが強力なのは産業革命による経済発展のためである」、「国家や政治が何をしなければならないか、それは国民を豊かにすることであり、国家を繁栄させることである」、「経済的な発展こそが政治のすべてである」、との思いがありました。したがって彼は、経済発展に全力をあげたのです。

では、国家の経済を発展させるためにはどうすればよいか。ナポレオンが打った手は、1番目に財政の立て直しでした。国の経済発展をはかるには、財政を健全化することが根本である。それには銀行が必要である。国家の中央にしっかりした銀行がなければならない、ということで、1800年2月に彼はフランス銀行を創設しました。これによって通貨の安定が図られ、財政が安定するとともに、経済発展の基礎がつけられたのです。

2番目には、税制です。すなわち税制がしっかり確立し、かつ公平でなければならない。とくに税制を公平にするためには直接税と間接税のバランスがとれている必要がある。直接税というのは、今日でいえば、たとえば働いた人の給料のなかから直接税金を取ってしまう、これが直接税です。間接税というのは、お酒とかタバコとか、人々が日常生活のなかで奢侈品というか嗜好品というか、そういうものを買ったときにかかる税金です。日本では消費税がその典型です。この直接税と間接税の調和をうまくはかることが大切であるということで、ナポレオンは徴税制度をしっかりと確立し、とくに現代でいう直接税と間接税のバランスをはかりました。そして両税のいずれもあまり高くないように配慮したのです。すべての国民から広く、薄く、かつ平等に税金が確実にとれるように計画したのです。この税制の整備は成功し、それが経済発展の礎石となっていったのです。

3番目に、産業の育成です。財政を立て直し税制を整備したならば、今度はいよいよ産業の発展です。ナポレオンはとくに新規事業の開拓を促します。今でいう起業でしょうか。新しく事業を起こす人に対しては助成金を出したり、新事業に対しては税金の還付を行います。新しい発明をした人には賞金さえ出しました。このように、事業をやる人の動機付けになるような措置を次から次に講じていったのです。

4番目に、農業です。ナポレオンは、「フランス産業の中核を為すのは農業である」、「農業を興すことがフランスの産業を発展させることにつながる」といって、農業を根本に据え、その上に工業、次に商業を置きました。すなわち、農業、工業、商業という順位付け¹⁴⁾を行って、とくに「農業は帝国の第一の基礎である」¹⁵⁾と重視したのです。農民に補助金を出し、農業の振興に力を注ぎました。

5番目に、商業です。順位付けとしては3番でしたが、ナポレオンは、商業のもつ物の流通、人々の生活の利便性、その他の点において商業がもつ力の大きさを知りぬいていました。そこで商業が円滑にいくように道路の整備をしたり、運河の拡張を図ったりしました。

6番目に、完全雇用の達成です。これは、今述べてきたナポレオンによる経済的繁栄の結果として、ほぼ達成したといわれております。ナポレオン時代には、フランス革命以前の時よりもフランス産業は25%成長したという統計があります。また、1806～7年、そして1810～11年、この2年間をのぞいてナポレオンの時代はほぼ完全雇用だったというデータもあります¹⁶⁾。「ナポレオンの時代には失業者というものがほとんどいなかった」との指摘すらあります。

経済的繁栄について、ナポレオンは後に、セント・ヘレナ島で「フランスの産業を創造したのは私である」と誇ったといわれておりますが、事実彼は、産業・経済の発展に大きな力を注いだのでした。

(8) 公共事業の振興

第8に、公共事業の振興です。ナポレオンは道路を作り、橋を架け、港を整備し、運河を設け、治水、下水の完備を行いました。道路、橋、港湾、運河、治水、下水、こういういわばインフラストラクチャーの強化をナポレオンは次から次へと図っていったのです。つけ加えますと病院とか刑務所とかの改善も行いました。こうしたナポレオンの公共事業の結果、彼の時代の14年間、すなわちナポレオンが権力の絶頂期にいた14年間の公共事業費は、18世紀の100年間のそれを上回る、とまでいわれております¹⁷⁾。それほど彼の事業によって、社会資本の基盤整備が大きく進んでいったのでした。

なお、特筆すべきことに、ナポレオンがパリの街の整備、パリの美化に全力をあげたことが挙げられます。記念碑を建て、チュイルリー宮殿とかルーブル宮殿とかを改築し綺麗な宮殿にしていく。凱旋門を作る。ヴァンドーム広場にはローマ時代の記念柱になった柱を建てます。特にルーブル宮殿を美術館に拡充したほか、全国15カ所に美術館を設立します。

ナポレオンが目指したのは、「パリを世界一の都市にする」、「パリを世界の中心にする」ことでした。それが彼の理想であり夢でした。こうしたところから、冒頭にも申し上げましたように、パリの街に行きますと、とにかく目に付くのは、ローマ時代の遺跡、ノートルダム寺院のようなキリスト教の遺産、それからナポレオンの足跡、こういうものが大変に印象的です。

少し脱線になりますが、美味しい料理とか文化遺産というのは絶対王制とか独裁者のもとで育つことが多いのです。民主主義ですと、「みんなが平等」で、「みんながいろいろなことをいう」。いろんな人の意見が入るということはよいことなのですが、結果的には平均化され、特徴のあるものにはなりません。後世に残るようなものはないのです。

美味しい料理などは、絶対君主や王様がいて、その下に料理人が集められて、諸国の様々な食材が取り寄せられて作られ、生まれます。民主主義の国は料理がまずいといわれております。例えば、イギリス、アメリカなどです。こういう民主主義が発展してきた国にはおいしい料理は生まれません。逆に専制的な国王などがいた国の料理のほうが美味しい。長い間皇帝が統治した中国の料理、国王がいたフランスの料理、そして君主の支配したイタリア料理とかです。

また、強力な支配者がいた国の文化は、大きな特徴を持って今日でも残っています。古代エジプトの遺跡とかいうものは、専制的な国王が作ったものです。民主主義的な国には特徴的な遺産はあまり残らない、ともいわれています。もちろんこれは、歴史的に振り返っていつていることで、だから独裁制がよいと勧めているわけではありません。

ナポレオンは、パリを世界一の都市にする、パリを永遠に残る都にしていく、と宣言し、凱旋門を作ったり、道路や広場を整備したりします。その結果、パリは歴史に残るような美しい都市へと発展していきました。ナポレオンは、後にセント・ヘレナ島で、「これらの事業は幾世紀にも残る財宝である」¹⁸⁾と自負しています。

ナポレオンがこのような公共事業を推進していくためには、工業とか技術とかいうものが必要でした。そのため彼には、新しい機械、新しい技術に注目し、それらをどんどん取り入れ、公共事業の発展に役立てていきました。同時に彼は、公共事業にたずさわる技術者を養成していったのです。

(9) 文化・学問の尊重

第9に、文化・学問の尊重です。広く学問的価値を重視したといえましょう。ナポレオンはコルシカ島の出身で、フランス語がうまく話せませんでした。フランスの学校に入り、その中で友だちの「いじめ」にもあい、幼心に傷つくことが沢山ありました。そのようななかで、ナポレオンの唯一の救いはとにかく本を読むことでした。一生懸命、本を読んで早くフランス語に慣れること。そしてなによりも知識をどんどんと吸収していくことが彼の最大の楽しみであり、なぐさめでした。こうした貪欲な学びの姿勢が、ナポレオンに学問とか文化とかを大事にする習慣を身につけさせていったのです。

彼は読書家でした。いわゆる学校の成績はあまり良くありませんでした。学校の成績はパリの陸軍士官学校時代、58人中42番とかです。しかし、学業成績はそれほどよくなくても、勉強することは好きでした。軍人になってもナポレオンは、どこに行くにも本を持っていきました。彼は皇帝になってから、チュイルリー宮殿とかブルボン宮殿とかいくつかの宮殿に住みましたが、どの宮殿にも必ず同じ図書をおき、同じ図書室を作りました。どこの宮殿にいてもすぐ同じ勉強ができるようにしていたのです。それほどナポレオンは、学問とか文化とかいうものを大事にしていたのです。

彼が1798年、エジプト遠征を行った時のことです。この遠征は、イギリスがエ

ジプトからインドへ行く航路を確保しようという計画を断つことにありました。ナポレオンはエジプトをなんとしてもイギリスではなく、フランスの影響下に置きたいという戦略を立てました。それと同時に、彼はエジプトに大きな魅力を感じていました。そこは、昔、なんといっても古代ギリシアやローマよりもはるかに栄えていました。ナポレオンにとって、エジプトというのは未知の国であり、東方への夢を沸き立たせる、ロマン溢れる場所でした。彼は1798年、ある友人に次のように語っています。

「ヨーロッパは一つのモグラの穴のようなものになっている。ここではすべてが磨り減ってしまう。東方へ行かなければならない。すべての偉大な栄光は東方から生まれるのだ」¹⁹⁾と。

ナポレオンはこういったのです。ヨーロッパは狭い、こんな狭いヨーロッパでゴチャゴチャ戦っては磨り減ってしまう、そうではなくて東方へ行くんだ、ギリシアへ、否、エジプトへ行くんだ、そしてそこからインドへ行きたい。ナポレオンは中国まで大きな関心を寄せていたといわれております。その第一歩として、アレクサンダー大王のように、西洋と東洋を結びつきたい。そのためにはなんとしてもエジプトへ行くといつてそこへの遠征を企てるのです。

ナポレオンは、1798年5月19日、いよいよエジプトに向けて出発しますが、その艦隊には3万3千余の軍人が乗っていました。と同時に、そこには167名の学者、文化人、技術者も乗り込んでいました。数学者、医者、天文学者、鉱山技師、建築家、詩人などがいたのです。2万5千冊もの本も運ばれました。

そのときのナポレオンの誇りは、「将軍ナポレオン・ボナパルト」と名乗ることよりも、「フランス学士院会員ナポレオン」と称することにありました。彼はエジプト遠征は単なる侵略ではない、エジプトの調査であり開発を施す重要な文化事業である、という意味を持たせたのです。

彼が幼少の頃に読んだ本のなかにローマの言い伝えがありました。それは、「エジプトを制する者が世界を制する」²⁰⁾という言葉で、それはナポレオンの心に焼きついて離れませんでした。その憧れのエジプト遠征を彼はついに企てるのです。実にヨーロッパにとってみれば、十字軍以来の東方遠征でありました。

遠征のなかで、ナポレオンはさまざまな課題を学者たちに与えました。例えば、「パンを焼く時、燃料を節約する方法は」、「ビールを造る時、ホップの代わりにエジプト産の植物を使えないか」、「ナイル川の河川を浄化する方法は?」、「カイロでは水車と風車とどっちがよいか」、「エジプトでは古来どのような法律制度、並びに民事、刑事の手続きがあったのか」、「教育制度はどうなっているのか」、「エジプトでの葡萄栽培の方法は」、「カイロに水を補給するには」、「天文台の設置にはどのような場所がよいか」、「ナイル川の水域、水位、水量を測る方法は」、「湿度、温度を観測する方法は」、「砂漠で井戸を掘る場合どのようにすることが最善か」、「エジプトで小麦を栽培する場合、ヨーロッパとどう違うか」、等々でした。ナポレオンは実に100に近い研究テーマを学者たちに与え、徹底的に研究させたのです。

エジプトに着くと彼は、「エジプト学士院」を創設します。この学士院は、数学

の部門、物理の部門、経済の部門、文芸の部門、そういう部門からなっていて、部門ごとに厳しい学問研究をします。こうした点を見ると、ナポレオンがいかに単なる軍事的な侵略だけではなく、古くからヨーロッパの夢とされていたエジプトという地域を徹底的に研究する、そういう学術的な目的を持っていたか、ということがわかります。

ナポレオンが手がけたエジプト研究は、やがて一つの学問体系として確立し、「エジプト学」というのが誕生します。「エジプト誌」という雑誌も生まれます。先程例示しましたような研究テーマを学者たちが一つ一つ研究論文としてまとめたのです。それは1809-28年、全20巻にもなり、今日でもエジプト研究には欠かせない資料になっています。ナポレオンのエジプト遠征は、軍事的には失敗でした。しかし、古代エジプトの様子はかなり解明されたといえましょう。

もうひとつ、ナポレオンのエジプト遠征で大きな成果がありました。それは、ロゼッタストーンという石の発見です。ナポレオン軍の兵士によって、それは発見されました。この石には、古代のヒエログラフという象形文字が刻まれておりました。後にこの文字が解読され、古代エジプトでは王様に対してどのような扱いがなされていたか、国王が何をしていたか。その一端がわかっていったのです。さらにもうひとつ、今でこそ地中海と紅海をつなぐスエズ運河というのがありますが、このスエズ運河の構想を練り上げたのはナポレオンです。彼は、スエズ運河をつくって地中海と紅海をつなげば、インドに行くのがはるかに楽になる。すなわち、西洋と東洋が密接に結びつくと思ったのです。

また、ナポレオンの有名な言葉も、このエジプト遠征から生まれています。エジプトは暑い国です。兵士たちはややもすると暑さに負けたり、風土病に倒れたりして、弱気になりがちです。そのときナポレオンは、ピラミッドを指差して、「兵士らよ！4000年の歴史が諸君を見ているぞ」といって兵士たちを鼓舞したのです。

なお、ナポレオンは、ケオプスのピラミッドをみた時に、瞬間的に、このピラミッドの石でもって、高さ3m、幅1mの石垣を作れば、フランス全土を囲むことができる、といいました。後で数学者が計算してみたら、ほぼその通りであった、という話も伝えられています。真偽のほどはさておき、ナポレオンが、数学のセンスと鋭いカンをもっていたことは事実といえましょう。

それ以外にもナポレオンは、エジプト遠征中、カイロで部下に対して「鉛筆」を発明させました。今も私たちが使っている鉛筆、これをコンテという人が発明します。コンテという人はさらに漂白剤をつくったり、あるいは熱気球の開発にも成功するのです。またナポレオンは、1800年、ヴォルタという人には電池を開発させ、彼には、1801年、伯爵の位を与えています。さらに1808年、アペールという人に命じて食料品の瓶詰めを発明させます。じつにナポレオンは、前述した産業のところでも少し触れましたが、鉛筆とか電池とか瓶詰めとか、今日私たちが日常的に使っている便利なものを、次々と発明させていったのです。いわゆる起業です。

少し話がそれましたが、以上のようにナポレオンは文化や学問を大変に重視したのです。

文化や学問を尊重したナポレオンでしたから、彼が一番尊敬した人は誰かという
と、それはドイツの文豪ゲーテでした。ナポレオンはゲーテの書いた『若きウェル
テルの悩み』という本を大変に好み、7回も読み返したといわれております。プロ
イセンに行った時、1808年10月2日、彼はゲーテに会います。ゲーテは59歳、
ナポレオンは39歳でした。その際、ナポレオンが最初にいった言葉は、「ここに偉
大な人間がいる。あなたこそ真の人間というものです」²¹⁾ というものでした。

ゲーテもまたナポレオンと会い大変に感動しました。彼が求めたヨーロッパの平
和は、ナポレオン帝国によって実現されると確信し、いつまでもナポレオンのこと
を心に留めておりました。そして次ぎのようにいいました。ナポレオンの「人格は
ずばぬけたものだった」²²⁾。「ナポレオンが偉大だった点は、いつでも同じ人間であ
ったということだよ。戦闘の前だろうと、戦闘のさなかだろうと、勝利の後だろう
と、敗北の後だろうと、彼はつねに断固としてたじろがず、つねに、何をなすべき
かをはっきりとわきまえて」いたと²³⁾。

このようにゲーテはナポレオンを賞賛していました。ナポレオンは常に変わらな
かった。いつも同じ人間であった。このようにいって、ゲーテはナポレオンの屹立
した態度に感銘していたのです。

また、ドイツの哲学者ヘーゲルという人がおりましたが、彼もまた、彼のいう歴
史を動かす原動力としての「世界精神」、この精神を体現しているのは、ナポレオ
ンであるといつて絶賛いたしました²⁴⁾。

さらに、音楽家のベートーヴェンらも、一時ナポレオンを渴仰しました。

なお、ナポレオンは、広く文化・学問という範疇のなかで、医学というものを大
変重視しました。軍隊にとって大切なことは、兵隊を殺さないということです。と
くにいろんなどころに遠征しますから、兵士が病気になることをナポレオンは大変
心配していました。そのため医療に彼は強い関心を払っていたのです。

1796年、イギリスの医師ジェンナーが天然痘を予防するために牛痘接種という
方法を開発しました。すなわち、牛に天然痘の病原菌を接種し、そこで免疫をつく
り、その免疫を人間に移して天然痘を予防するという方法です。牛痘を人間に接種
することによって免疫をつくり、天然痘を防ぐという考え方をナポレオンは大変に
高く評価しました。当時は多くの人たちが、「牛痘を人間に植え付けるなんてとん
でもない」といっていましたが、しかしナポレオンは、ジェンナーの牛痘接種とい
う考え方は大変に素晴らしい、と評価したのです。その頃、フランスはイギリスと
戦っていたにもかかわらず、1804年、ナポレオンは敵国イギリス人の医師ジェン
ナーに記念のメダルを贈ってその発見を称えました。フランス軍の兵士、及び、一
般の人々がこの牛痘接種によって多く救済されたことはいまでもありません。こ
のようにナポレオンは、広く文化・学問・学術の価値を高く評価し、その興隆に力
を注いだのです。

(10) 文化遺産の構築

第10に、文化遺産の構築があげられます。ナポレオンの時代に新しい建物とか

新しい技術とかが次々と生まれました。パリには記念碑的な建物がどんどん出来ま
す。カルーゼル凱旋門とか、ルーブル美術館の再開とか、広場に噴水を作ったりと
か、パリの街は美しくなっています。コンコルド広場の周辺には、マドレーヌ寺
院とか国会議事堂とか、あるいはカルーゼル凱旋門とかエトワール広場などがあり
ますが、すべてナポレオン時代に整備されたものです。宮殿の室内装飾では、古代
エジプトやローマで栄えた絢爛豪華な色彩で飾られたものが多くあります。家具で
は「アンピール」(帝政)様式と呼ばれるものが生まれます。これは幾何学的で重
厚な感じが特徴になっています。ファッションの面においてもアンピール・スタイ
ルという形がはやりました。サテンとかビロードなど華やかな素材を使った婦人服
が絢爛と花を咲かせたのです。

なお、ナポレオンの時代は各種の文化面でも大きな成果がみられました。文学に
おいては、スタンダールやユゴー、またデュマやバルザックというような文豪が、
ナポレオンやその時代をテーマにした作品を残しました。19世紀最大のドイツの
オペラ作曲家ワーグナーは、「音楽界のナポレオンたらん」と宣言していました。
また、時代は下りますが、喜劇王チャップリンにナポレオンの映画を作るように勧
めたのはイギリスのチャーチル首相であったといわれております。

このようにパリの街の景観や宮廷芸術をはじめ、今日まで残る幅広い芸術・文化
の遺産は、ナポレオン時代に築かれたのです。

10. 終わりに——意外な3つのイメージ

以上述べてきましたナポレオンの生涯とその業績について、ひと言でその印象を
申し上げれば、こんなことが、一人の人間の一生の間に出来るものなのか、という
ことです。それほどナポレオンが手がけ、残した実績は大量かつ膨大なものだった
のです。しかも、今日まで残る偉大なものであることはいまでもありません。

だが最後に、これほど多くの偉業をなしたとげたナポレオンについて、通常懐かれ
ているイメージとはやや異なる3つの実態ともいべき側面を指摘してみたいと思
います。多くの人は意外と思われるかもしれませんが、しかし、その意外性と実態と
のギャップの大きさが、ナポレオンを一層大きくみせているといってもよいでしょ
う。

第1に、ナポレオンの幼少期から青年期にかけては、将来、それほど大きな立場
につき、重要な仕事をする人物にはとてもみえなかった、ということです。ナポレ
オンは、生まれながらの神童では決してなかったのです。幼い頃のナポレオンの姿
や言動から判断して、誰が、この子が将来、フランスの皇帝になり、フランスはも
とより、ヨーロッパや世界の歴史を変える英雄になることを想像したでしょうか。
およそ、そのような人物とは遠くかけ離れたところにナポレオンはいたのです。

幼少期から青年期にかけてのナポレオンはコルシカ島という辺鄙な島出身で、
フランス語も満足に話せず、病弱で身体も小さく、引っ込み思案の目立たない子供
でした。学業成績も決して芳しくありません。それが、革命と戦争の動乱の中から

大きく成長し、身体も丈夫になり、皇帝となってフランスの近代国家としての土台を築くとともにヨーロッパに君臨する身となったのです。平凡な一少年が、偉大な皇帝となって、人類の歴史に新たな1ページを書き加えたのです。

人間はどうなるかわからない。一人の人間には無限の可能性が秘められている。小さいころの身分とか、学業成績とかは全くあてにならない。本人の意思と努力によって、状況はいくらでも開けていくということをナポレオンの生き方は物語っているといえましょう。

第2に、ナポレオンの統治の期間はわずか15年余であったということです。ナポレオンが皇帝になったのが1804年。ワーテルローの戦いで敗北し、退位したのが1815年です。皇帝として君臨していた期間は、実質11年です。第1執政(統領)の時代が5年ありますから、指導的地位についていたのは、計16年といってもよいでしょう。しかし、長いヨーロッパの歴史から見れば、16年というのはあまりにも短い期間です。ナポレオンの歴史的偉業は、何10年間も、何100年間もかけて達成されたものでは決してないのです。わずか16年のうちに樹立されたものです。これもまた意外といえましょう。

ナポレオン研究の第一人者で、歴史家のJ.チュラールは次のようにいっております。「ナポレオンの冒険は、近代エジプトの出発点になったし、ラテンアメリカ独立の契機にもなった。また、イギリスによるオーストラリア領有を促進し、現在もそのまま使われている道路網をジャワに与えることにもなった。ナポレオン戦争の影響は、北アメリカの五大湖、インド洋の沿岸にまでも及んだ。ナポレオンについて研究した最初の歴史家の一人は中国人だったし、ブラジル人歴史家がのちにこれに続いた。つまり、ナポレオンの威光は全世界に及んだのである」²⁵⁾と。わずか10数年間の統治にもかかわらず、ナポレオンの業績は永遠のものとして世界にその光彩を放ち、人々を魅了し、興味を喚起させているのです。全生命をかけて取り組んだ仕事は、たとえその期間が短くても、不滅の魂となって輝いていく証左といえましょう。

第3に、ナポレオンの業績は決して軍功だけにあったのではなく、むしろ政治、経済、文化面において顕著であったということです。いわば、彼をたんなる軍人や英雄としてみる見方は誤ったイメージで、むしろ政治家、実業家、文化人としての多角的側面を持った平時のリーダーと受けとめる方が実態に近いといえましょう。本稿でも紹介してきましたように、ナポレオンの業績は、そうした多面的な側面を持つものなのです。これも意外なことと思われるかもしれません。

ともあれナポレオンの残した業績には膨大なものがあります。それだけに、ナポレオンをどう捉えるかについては、歴史家の数だけその見方があるともいわれております。いな、時代が変化するたびに、ナポレオンの評価も変わってくるでしょう。19世紀の文豪スタンダールはいいました。「ナポレオンの伝記は50年ごとに書きかえられなければならない」²⁶⁾と。この言葉が意味するものは、ナポレオンの歴史は、「けっして終わることがないだろうし、完全に書きつくされることもけっしてないだろう」²⁷⁾ということなのです。「ナポレオン、それは未完の巨人である」と

申し上げて本稿を締めくくりたいと思います。

注

- 1) Ben Weider, *Napoleon Liberte-Egalite-Fraternite*, Les Editions de l'Homme, 1977, P,71.
- 2) オクターヴ・オブリ編 (大塚幸男訳) 『ナポレオン言行録』 (岩波文庫, 1983年) 196頁。
- 3) 同上, 197頁。
- 4) 同上, 259頁。
- 5) 松浦義弘「フランス革命のフランス」『フランス史2』 (山川出版, 1996年) 403頁。
- 6) Owen Connelly, *The French Revolution and Napoleonic Era*, Harcourt College Publishess, 2000. 参照。
- 7) オクターヴ・オブリ編, 前掲書, 262頁。
- 8) ティエリー・レンツ (福井憲彦監修・遠藤ゆかり訳) 『ナポレオンの生涯』 (創元社, 1999年) 150頁。
- 9) オクターヴ・オブリ編, 前掲書, 269頁。
- 10) Owen Connelly, *op.cit.*, P.213.
- 11) Christian Cherfils, *Napoleon and Islam From French and Arab Documents*, Utusan Publications & Distributors SDN BHD, 1999.
- 12) 篠塚昭次『民法口話 1 民法総則』 (有斐閣, 1992年) 9-10頁。
- 13) 柏倉康夫『エリートの作り方 —グランド・ゼコールの社会学』 (ちくま新書, 1996年) 33頁。
- 14) Lucian Regenbogen, *Napoleon A Dit Aphorismes, citations et opinions*, Les Bells Lettres, 1996, P.148.
- 15) Ben Weider, *op. cit.*, P.148.
- 16) Owen Connelly, *op. cit.*, P.217
- 17) 本池立『ナポレオン 革命と戦争』 (世界書院, 1992年) 138頁。
- 18) 池田大作『波瀾万丈のナポレオン』 (潮出版社, 1997年) 225頁。
- 19) オクターヴ・オブリ編, 前掲書, 82頁。池田, 前掲書, 189頁。
- 20) ナポレオンの東方の夢を詳述したものが, 両角良彦『東方の夢 ボナパルト, エジプトへ征く』 (朝日新聞社, 1992年)。
- 21) 坂井栄八郎『ゲーテとその時代』 (朝日新聞社, 1996年) 230頁。
- 22) エッカーマン (山下肇訳) 『ゲーテとの対話』 (岩波文庫, 1993年) 97頁。
- 23) エッカーマン, 前掲書, 105頁。
- 24) 福吉勝男『ヘーゲルに還る 市民社会から国家へ』 (中公新書, 1994年) 60-61頁。
- 25) ロジェ・デュフレス (安達正勝訳) 『ナポレオンの生涯』 (白水社, 2004年) 177頁。
- 26) ティエリー・レンツ, 前掲書, 159頁。
- 27) ロジェ・デュフレス, 前掲書, 178頁。

参考文献

- 1) 桑原武夫『世界の歴史 10 フランス革命とナポレオン』 (中公文庫, 1994年)

- 2) 河野健二・樋口謹一『世界の歴史 15 フランス革命』(河出書房新社, 1989年)
- 3) 五十嵐武士・福井憲彦『世界の歴史 21 アメリカとフランスの革命』(中央公論社, 1998年)
- 4) 谷川稔・北川敦・鈴木健夫・村岡健次『世界の歴史 22 近代ヨーロッパの情熱と苦悩』(中央公論社, 1999年)
- 5) 柴田三千雄・樺山紘一・福井憲彦『世界歴史大系 フランス史2—16世紀~19世紀なかば』(山川出版社, 1996年)
- 6) エミル・ルドイッヒ(中岡宏夫・松室重行訳)『ナポレオン上・下』(鱒書房, 昭和16年)
- 7) スタンダール(佐藤正彰訳)『ナポレオン傳』(河出書房, 昭和19年)
- 8) 井上幸治『ナポレオン』(岩波新書, 昭和47年)
- 9) キース・アディ(木村尚三郎・福田素子共訳)『ナポレオン』(西村書店, 1989年)
- 10) ティエリー・レンツ(福井憲彦監修)『ナポレオンの生涯』(創元社, 1999年)
- 11) ジョルジュ・ハノートル(大塚幸男訳)『ナポレオン秘話』(白水社, 1991年)
- 12) アンリ・カルヴェ(井上幸治訳)『ナポレオン』(白水社, 1994年)
- 13) 山上正太郎『ナポレオン・ボナパルト』(社会思想社, 1994年)
- 14) 長塚隆二『ナポレオン上・下』(文春文庫, 1996年)
- 15) 本池 立『ナポレオン 革命と戦争』(世界書院, 1992年)
- 16) 岡本明『ナポレオン体制への道』(ミネルヴァ書房, 1992年)
- 17) 専修大学人文科学研究所編『フランス革命とナポレオン』(未来社, 1998年)
- 18) 別冊歴史読本 総集編『大ナポレオン百科』(新人物往来社, 平成5年)
- 19) 鶴見祐介『ナポレオン』(潮出版社, 2000年)
- 20) J. P. ベルト(瓜生洋一・新倉修・長谷川光一・松島明男・横山謙一訳)『ナポレオン年代記』(日本評論社, 2001年)
- 21) 杉本淑彦『ナポレオン伝説とパリ 記憶史への挑戦』(山川出版社, 2002年)
- 22) ポール・ジョンソン(富山芳子訳)『ナポレオン』(岩波書店, 2003年)
- 23) ロジェ・デュフレ(安達正勝訳)『ナポレオンの生涯』(白水社, 2004年)
- 24) ラス・カーズ編(小宮正弘訳)『セント・ヘレナ日記抄』(潮出版社, 1999年)
- 25) ラス・カーズ(小宮正弘編訳)『セント・ヘレナ覚書』(潮出版社, 2006年)
- 26) アンドレ・マルロー編(小宮正弘訳)『ナポレオン自伝』(朝日新聞社, 2004年)
- 27) オクターヴ・オブリ編(大塚幸男訳)『ナポレオン言行録』(岩波文庫, 1983年)
- 28) 両角良彦『東方の夢 ボナパルト, エジプトへ征く(新版)』(朝日新聞社, 1992年)
- 29) 両角良彦『セント・ヘレナ落日 ナポレオン遠島始末(新版)』(朝日新聞社, 1994年)
- 30) 両角良彦『反ナポレオン考 時代と人間(新版)』(朝日新聞社, 1998年)
- 31) 鈴木杜幾子『ナポレオン伝説の形成 フランス19世紀美術のもう1つの顔』(筑摩書房, 1994年)
- 32) 岩下哲典『江戸のナポレオン伝説 西洋英雄伝はどう読まれたか』(中公新書, 1999年)
- 33) 坂井栄八郎『ゲーテとその時代』(朝日新聞社, 1996年)
- 34) 福吉勝男『ケーゲルに還る 市民社会から国家へ』(中公新書, 1999年)
- 35) 柏倉康夫『エリートをつくり方 —グランド・ゼコールの社会学』(ちくま新書, 1996年)

- 36) 篠塚昭次『民法口話 1 民法総則』（有斐閣, 1992年）
- 37) 内田 豊『民法I 総則・物権総論 [第2版]』（東京大学出版会, 1999年）
- 38) 宮崎孝治郎『ナポレオンとフランス民法』（岩波書店, 昭和12年）
- 39) 池田大作『波瀾万丈のナポレオン』（潮出版社, 1997年）
- 40) 高村忠成『近代フランス政治史』（北樹出版, 2003年）
- 41) 『特別ナポレオン展カタログ』（東京富士美術館, 1999年）
- 42) 『栄光の大ナポレオン展 文化の光彩と人間のロマン カタログ』（東京富士美術館, 2005年）
- 43) Lucian Regembogen, *"NAPOLEON A DIT APHORISMES, CITATIONS ET OPINIONS"*, LES BELLES LETTRES, 1996.